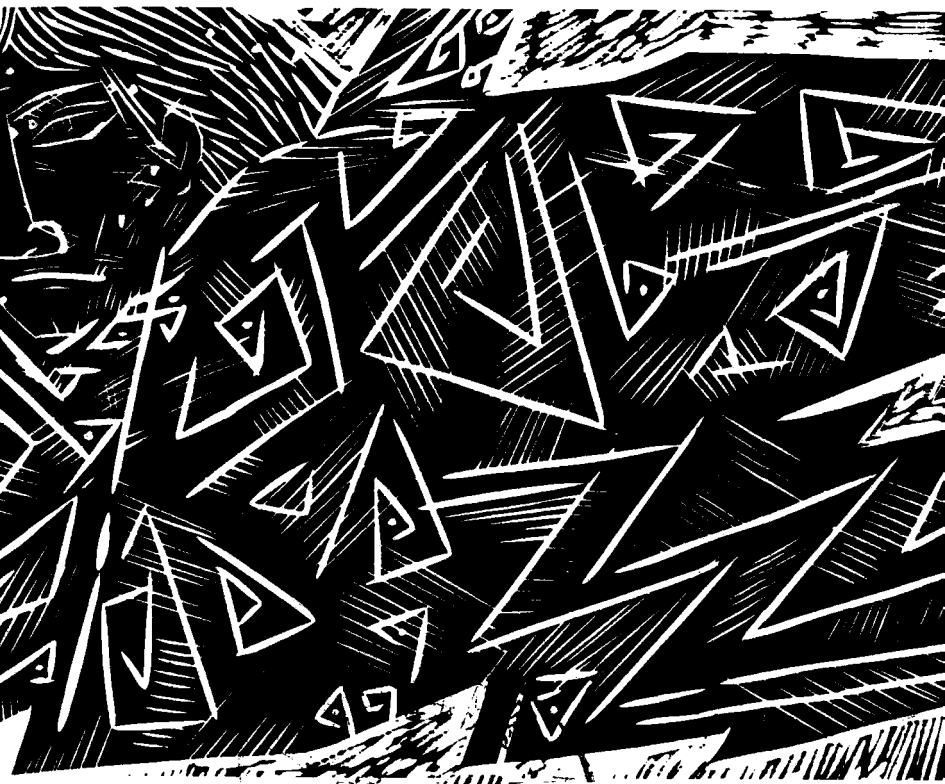


稲妻よ、奔れ

梶山季之

检妻よ、奔れ

梶山季之



新潮社版

いなすま
稲妻よ、
はし
奔れ



定価七八〇円

印刷 昭和五十年八月十日

発行 昭和五十年八月十五日

著者 梶山季之

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話 業務部 03(266)五一二 編集部(266)五四二一

印刷所 株式会社金羊社
製本所 新宿加藤製本株式会社

©1975 Minse Kajiyama. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします

稲妻よ、
奔れ^{はし}

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

「兄ちゃん……」

後山の志保が、不意に、息苦しうに、先山の熊吉に呼びかけた。

「なんな！」

熊吉は、ちよつぱり邪慳な口調で、振り向きもせずに答える。

彼は今、俗に「尺無し」と言われている、薄い炭層に、敷き腕で取り組んでいるところだった。敷き腕とは、膝に腕を凭せかけ、前踰みの窮屈な姿勢で、ツルハシをふるって掘り進んで行く、特殊な採掘法である。

なにしろ、頭を上げられないので、かなり苦しい労働なのだ。

熊吉は、ネジリ鉢巻に、六尺褌一本。志保は、手拭を姉さんかぶりにして、木綿の腰巻姿。

明りは、魚油皿だけである。

熊吉は、背中に昇り竜の刺青をしていた。しかし、その刺青は汗と粉炭とで、黝ずんで見える。

「兄ちゃん！　なんか、可怪しかとよ！」

志保は、低く訴えた。

「可怪しか？」

熊吉は、ツルハシの手をとめて、斜め背後に顔を向けた。

見ると、妹の志保は、スラと呼ぶ竹製のカゴに寄りかかって、喘いでいる。なにか、様子が変であった。

「どうしたとや？ 具合の悪かとか？」

熊吉は訊いた。

志保は、十六歳である。

このところ、めっきり乳房が大きくなって来たことには気づいていたが、肥り肉の方なので、まさか妹が妊娠しているなどとは、考えてもみなかった兄の熊吉であった。

「なんか分らんけんど……」

志保は、そう言うなり、仰向けに倒れた。

熊吉は、尻の方から体の位置をずらせて、妹の傍に駆け寄った。

あまり慌てすぎたので、魚油皿を蹴飛ばしてしまい、狭い斜坑は真ッ暗になる。

「おい！ どげした！」

熊吉は、妹の肩をつかんで揺さぶった。

志保は、ウーン、ウーンと苦しそうに唸り声をあげている。

「おい！ 志保！」

熊吉は、なにか異常なものを察知すると、

「待っとけ！ いま、火番所で、火ば貰うちくるけん！」

と言うなり、切羽を伝わって坑道から火番所へと走った。

火番所は、むろん地上にある。

坑内の捲き立て付近に、火番所が設けられるようになったのは、明治三十二年になってからのことで、慶応から明治に変わり、新政府が出来たばかりの当時には、地上にしか火を貰うところは

なかつたのである。

熊吉が、火種を貰い、納屋頭から与えられた自分の切羽に戻ってみると、愕いたことに赤ん坊の泣き声がしている。

それも威勢のよい泣き声だった。

「おーたア！」

熊吉は、仰天して、立ち竦んだ。

妹の志保の傍間に、小さな生物が転がっていて、泣き喚いているのである。

志保は、腰巻でその赤児を包み込もうとして、必死になっている。

「阿呆たれ！」

熊吉は叫んだ。

なぜか、膝がガクガクして震えた。

山の荒くれ男と、喧嘩してもビクともせず、堂々としている男が、妹が赤児を分娩して内股を血だらけにしているのを目撃したとき、ガクガク震えたのは、どういう訳であろうか。

熊吉は目を瞑って、志保の腰巻を無我夢中で剥ぎ、泣き叫んでいる小さな肉塊を、それにくるんだ。

「へ産湯を使わせんば！」

と、彼は思った。

熊吉には、女房がある。

だから、赤ん坊が生れたなら、臍の緒を切って、産湯を使わせるのだ……ということ位は知っていた。

しかし、臍の緒は、すでに切られていた。いや、赤ん坊は、臍の緒を切らねば、決して産声をあげないのである。

彼は、魚油皿を翳^{かき}してみた。

志保の唇に、血糊^{ちりり}がベツトリと付着している。彼女自身が、臍の緒を噛み切った証拠である。
へフーム！〜

熊吉は、何故か感動していた。

女には、男に真似の出来ない、なにか怖い本能があるようであつた。

『志保！ 良かッ！』

熊吉は叫んだ。

「兄ちゃん、良か、良か。ぼってん、なにかもう一寸、出ることあるけん……」

志保は、冷静な声でそう呟^{つぶや}いて、手を振った。アツチへ行つていて欲しいという、意思表示であらう。

へあと産たいな！〜

熊吉は、そう判断した。

分娩した赤ん坊は、臍の緒をつけて、生れ落ちてくる。

この臍の緒を切ると、産声をあげて泣き出し、残つた臍の緒に、胎盤がついていて、やがて子宮から剥がれて出て来るのだ。

熊吉は、医学的な知識はないが、出入りの産婆から、そんな程度の教えは受けていた。

彼は、志保の腰巻にくるんだ赤ん坊を、抱^{かか}え上げると走りだした。赤ん坊は、蒨弱^{こんじやく}のように頼りない感じで、しかし泣き声だけは大きかった。

炭坑には、幾つかのタブーがあつた。

たとえば、烏^{からす}の啼^なき声だの、飯に味噌汁をかけることだの、亭主が入坑中に煎^いり豆などをすることは忌^いみ嫌^いわれた。

坑内では、頬かむりすること、切花を飾ること、口笛、拍手、女が髪を梳くことなどが、タブーとされていたものだ。

朝、烏が啼くのは、死人を呼ぶ前兆とみられていたから、特に嫌われたのであろう。

味噌汁を飯にかけると、ミソがつくとか、ケチがつくと言って、縁起をかつぎ、それを知らずに味噌汁飯を食った新入りの坑夫など、リンチされたものだという。

煎り豆などを禁じたのは、恐らく家内に、イリモノがある（つまり法事がある）ということからだろう。

頬かむりは、両耳をふさぐため、坑内の事故が判らないためだと思う。

切花は、仏事を連想し、根無し草という意味から忌んだのであろうか。

口笛、拍手は、おそらく坑内で異変が起きたとき、危急の合図に、竹笛などが用いられていた為だと思う。

ただ、女が髪を毛を梳くことを禁じたのは何故か判らない。普通だったら、苦死（極）削る……と言って、縁起がよい筈なのであるが、タヌキ掘りなどと言われていた時代だから、なにか理由があったのだろう。

タヌキ掘りとは、小さな坑道から這い出す姿が、まるでタヌキが穴から出てくるみたいな恰好だったからである。

死人のことを黒不浄と言い、女性の月のさわりを赤不浄と言い、これまた忌み嫌われていた。遠賀川（おんがが）の川筋では、子供が生れても、縁起をかついで産婦は三日位は、坑内に入ることを中止した位であった。

況してや、熊吉の妹の志保は、坑内で早産したのである。

つまり、当時の下罪人（げざいむ）たちには、志保は神聖にして、かつ危険きわまりないヤマを漬（けが）したことになるのであった。

下罪人と言うと、まるで犯罪者のように聞えるが、別にそうではない。

ただ、諸国を食いつめた流れ者とか、酒とバクチと女で勘当された者とか、村八分になって故郷を捨てた者などが、その頃の坑夫には多かったのである。

むろん、凶状持ちも混っていたろう。

遠賀川の炭坑地帯では、こうした坑夫のことを、下罪人とか、「たんこたれ」（炭坑太郎の意）とか、「石山党」などと呼んだ。

いずれも蔑称である。

——人と坑夫がケンカして、坑夫が人に怪我をさせた。

などという世間話が、堂々と通用していた位だから、当時の坑夫が、いかに一般社会から差別されていたかが、判るであろう。

しかし、そうした世界であるが故に、いわゆる「川筋氣質」を産んだとも言えるのだ。言うなれば、義理と人情を重んじ、宵越しのセニは持たず、酒と女とバクチとに明け暮れる任侠の氣風である。

熊吉は、志保の産み落した赤ん坊を、人知れず坑内から持ち出そうと図ったが、ドッコイ、そうは問屋がおろさなかった。

なにしろ、無心に泣き叫ぶ赤ん坊である。いくら、スラの中に入れていても、すぐ判ってしま

う。

熊吉は、地上に出る寸前で、仲間の坑夫たちに取り囲まれ、

「そらア、なんな？」

とツルハシで脅迫された。

「志保が、産みよったとたい」

熊吉は観念して答えた。

「こん中で、産んだとか！」

誰かが、語氣荒く叫んだ。

「仕様なかる。出物、腫物、ところ嫌わずたい！」

熊吉は、開き直った。

「ヤマば、血で汚しとって、なんば威張りよるとか！」

「どうせ、父無し児じゃろう！」

「そげん、汚れ腐った赤児、一步でん外さ出すわけにや、いかん！」

みんな口々に叫んだ。みんな、目が血走っている。

地底の中は、地獄である。

今日みたいに、カンテラもなく、ツルハシ一本で掘り、上り片盤はスラを使い、下り片盤はセナを用い、ヤマから積込場までは駄載と言って馬で運び、それから遠賀川を船で下った時代のことであった。

だから坑夫たちは、物凄く縁起をかついたのである。まあ、西洋文明に直接、触れない当時としては、無理もなからう。

……この時、坑夫たちの紛争を知った、納屋頭の根本亀次郎が、坑口から飛び込んで来なかったならば、本篇の主人公である辰巳午之助は、この世と泣き別れとなっていたかも知れない。

亀次郎は、長州征伐に来て、そのまま、九州に流れて来た江戸の御家人の次男坊で、ベランメエ言葉を使った。

柔剣道、槍術、水泳をよくし、田川地方の二十四頭領と言われた納屋頭の名家（？）根本家の一人娘・佐穂が水に溺れるところを救ったが機縁で、入り婿となった人物である。

「お前っちは、何を仕出かしやがる積りなんでエ！」

亀次郎は一喝した。

彼は、腕ッ節がつよく、また珍しく理財觀念が発達して、統率力もあった。

当時、納屋頭と言われた頭領は、石炭百斤について、口錢二十文、酒二合半、米四合を支給されるのが、しきたりだった。

しかし根本組では、飯場制度と、代用切符制をとり、労働者である坑夫たちを、完全に掌握していた。はっきり言えば、これは労働者に対する搾取であつたのであるが。

「熊吉の妹が、こともあろうに、赤ん坊ばひねり落して、ヤマを汚しちよるとですたい！ それで、みんなが……」

日頃、熊吉と仲のわるい清次という片目の男が、弁解するように言った。

清次は、ヤマで言う粉炭坑夫で、腕はあまりよくない。つまり、炭塊を切り出せないで石炭の粉ばかりを散らす坑夫という意味だ。切羽がまだ、よく判らないのである。

本人は、片目のためだ……と主張しているが、やはり努力不足なのだろう。

しかし、亀次郎は、清次の言葉をきくと、

「ほう！ やや児が生れたのか！」

と顔を綻ばせ、

「こらア、縁起がいい！」

と叫んだ。

「なして、な？」

と不服そうに清次が問い返す。

「馬鹿！ こんな暗いタヌキの穴から、子供が産れたんじゃねえか！ 熊吉の切羽からは、素晴らしいイシが掘れるぞ！」

亀次郎は言った。

……なるほど、物は考えようである。

殺氣立っていた坑夫たちも、構えていたツルハシをおろし、

「そう言やア、坑内で子供を産んだちゅうとは、初耳たいな！」

と呟き合っている。

「よし！ みんな仕事に戻れ！」

亀次郎はそう言って、

「その子の名前は、わしが付けてやろう」

と熊吉に告げた。

ときに、明治三年五月――。

午歳みづえの、青葉の盛りである。

「母ちゃん。なして、俺には、父ちゃんの、居らんと？」

午之助は、母の志保に言った。

志保は困ったように俯うつむ向き、

「お父ちゃん、死んだとよ……」

と呟いた。

むろん、嘘うそである。

志保は納屋頭の亀次郎に、手籠てごめにされていたのであった。

亀次郎は、体格もよく、揉み上げの毛が濃くて、胸板の厚い好い男であった。

当時、田川地区の炭坑では、納屋制度がとられはじめていた。

これを創はじめたのは、亀次郎である。

つまり、毎日々々、人練りをする労力を嫌って、彼は徳川幕府時代の金山を真似て、飯場をつくったのだ。

労働者が生活する宿を提供し、三度の食事を賄^{まふ}つてやり、労働力を確保するという、画期的な試みに着手したのである。

飯場は、独り者と、家族との二棟^{むき}に別れていて、独り者は大部屋で雑居だが、家族には三疊から四疊半ぐらいの部屋が、それぞれにあてがわれる仕組みであった。

家族部屋と言っても、押入もなく、ただ寝るだけの部屋である。

流れ者の夫婦が多く、熊吉と志保のような兄妹というケースは珍しかった。

二人の両親も、たんにこれであつた。父親が先山、母が後山として働いていたが、落盤のため死亡したのである。熊吉が十四歳の折である。

亀次郎は、ちょうど根本組の養子になつた許^{ばか}りの時で、二人の兄妹を引き取つて面倒をみてくれた。

熊吉は十五歳になつてから、ヤマに入り、仕事をはじめた。同時に、酒とバクチと女の味を覚えてた。

その頃は、現在のように便利な機械もなく、ツルハシの手掘りである。これを先山と言つた。その先山が掘り出した炭塊を、スラやセナで運び出すのが、後山の仕事で、大体において女がこの仕事に従事した。早い話が、夫婦が一組になつて仕事をしていたのである。

志保は、十歳の春から、兄の熊吉と組んでモグラ生活をするようになった。

兄が掘り出した石炭を、カキ板で、エブと呼ぶ竹ザルに集め、スラに入れる。

スラとは、楕円形の竹籠で、底に竹の櫛^{もろ}が取り付けられてある。

これを、しゅろ縄で結び、獣のように四つ這いになつて引つ張りながら、穴から這い出て坑道に運び出すのだ……。

セナは下り片盤の場合に用いるのだが、これは不恰好な天秤^{てんびん}棒と、二個のザルだと考えたらよい。

しかし土工のように、立って肩で拍子を取りながらは運べない。天井が低いからだ。これが狸掘りの泣き所であった。

セナ棒を背中にして、シュ木と呼ぶ五寸ぐらいの短い杖を突きながら、灯皿を片手にして十四、五貫もある石炭を、ウン、ウンと唸りながら運び出すのは、子供には大変な仕事であったのである。

だが、志保は、さほど矛盾を感じないで、兄の仕事を手伝った。

やはり、周囲がそんな環境だったからであらう。とにかく働けば、銀シャリに三度ずつありつけるし、女子供には、月に二回、センザイか、牡丹餅が出る。男には、毎日、一合の酒が出る仕組みだった。

……ところで、志保が亀次郎に犯されたのは、“人繰り”と呼ぶ督促係から、条件のわるい仕事場にばかり廻されるからであった。彼女は、兄の熊吉が、愚痴ばかりこぼすので齒痒くなり、亀次郎に直訴したのだ。

亀次郎は、

「お前、幾つになったな？」

と訊き、志保が十五だと答えると、

「よからう。お前が半人前だから、差別されるんだ。わしが、大人にしてやろう……」

と言ひ、志保を抱いたのである。

志保は、大人になるとは、なんと痛いことだろうかと思った。

それから暫くして、熊吉は、厚い炭層の方にと廻された。志保は、お礼を述べに行つてまた抱かれてゐる。

おそらく、その二度目の時に、午之助を懐妊したのであらう。

亀次郎が、ヤマを血で漬した志保の罪を許し、名付け親になった経緯は、以上の如くである。

兄の熊吉からも、

「父親は、誰な？ 叱らんけん、言うちくれ……」

と、何回も言われ、責められた。

しかし、志保は誰にも、父親の名は言わなかった。一生、誰にも明かさぬ積りである。午之助は、すでに数えて五つであった。

兄の熊吉は、荷事故のため片輪となり、いまは勘場係に出世している。

荷事故というのは、地殻の変動や、古くなったがため、地圧で切羽や坑道が決潰する事故のことである。川筋の人々は、それを「荷が来た」と表現していた。

また勘場というのは、坑夫たちに日用品雑貨を売ったり、採掘した石炭の品質を検査するところである。

坑夫たちの給料は、炭券と呼ばれる切符で支払われた。

この切符は、それを発行した炭鉱では、金券として通用するが、一般の世間では、タダの紙きれである。

つまり、坑夫たちの逃亡防止のため、亀次郎が考えた方式だったのだ。

この炭券を、現金化する時には、二割から、三割の手数料をピンハネする。

また日用品雑貨も、一般に割高で売られ、世間より安いのは酒ぐらいなものであった。もっとも、その酒も、一升に対し、水二合を加えた悪質な酒であったが……。

石炭の品質検査も、勘引きするのが、勘場の仕事みたいなものであった。

荷積みが少ない、とか、ボタが多い、とか難癖をつけて、二合引き、三合引き……という風に、これまたピンハネするわけだ。

熊吉は、その勘場係に、亀次郎から抜擢されたわけで、ある意味では出世だが、しかし坑夫たちの怨みを一身に買う職務でもあったのである。